新潟の水辺だより
niigata-mizubenokai report
Vol.80
●編集発行
特定非営利活動法人
新潟水辺の会
●発行日
2011年02月01日

report 01

通船川の舟旅ツアー

【横山通ベテラン船長のメーリングニュースより】

11月21日（日）は前から予定されていた県地域振興局主催の『水辺愛護の交流見学会』午前の部で通船川往来にお付合いとなりました。天気はありがたい快晴となり川遊びには最高な日和でした。参加者は30数名、当会ボート3艇で2班に分け、2回の河口の森船着場から松崎橋往復となりました。船頭は安田さん、相楽さん、加藤さん、横山の4人が務めました。

前を行くボートに追尾する時、引き波に乗らない様にするのが揺られないコツ（ポイント1）のようです。

2回目安田艇は、万代高校のカヌー部の皆さんと。安田さんの運転も安心して見ていられるようになりました。かつての木戸閘門跡には釣り人が多く、ゴミの川を気にせず釣っていました。曰く『当方も楽しんでいるので静かに通過してくれ』、『川岸近くを通らないでくれ』などと苦情？（ポイント2）を言っていました。納得できるところと、釣り人が何言ってんだ、という気持ちと半々です。

万代高校のカヌー部の顔を見るとまぁ楽しんでもらえたかなという感じです。カヌー部の皆さんはいわば短距離ランナーです。

しかし川は短距離だけのフィールドとして使うだけではその真価はわかりません。（小阿賀野川から信濃川、通船川と）長距離を時間をかけて下るときその本当の顔を見せてくれるように思います。

通船川にも三角波があった…オーこわッ！

●ポイント①「追尾時の引き波に乗らないこと」、とありますが、両岸が矢板護岸のせいか、前の舟の波と護岸で跳ね返る波で、操船できない状態にちょっとなりました。いわゆる舟の転覆遭難が出るのでよく知られている『三角波』でしょうか？右に左に舟先が振れて。同乗者の4人は少し「大丈夫かな」というような不安そうに振り返りましたが、舟長が頼りなさそうでは不安を煽りますので（任せなさいと言わず）笑顔で応えました。実際は、少し速度をスローダウンして回避しました。舵を取られるとは、こういうことなんですね。納得！体得。

三角波のうねりが前方に広がる。中流部

●ポイント②「釣り人との関係」、釣り常連は、こちらの操船の未熟さを見抜いていたようです。波が岸の護岸で大きくなるので足元が濡れる「いい加減にしてくれ」、「それも3艇も続けて波を起こすなんて」と言いたげでした。でも「今回だけは大目に見てやる」とも見えました。要はこちらの低速前進の技術が未熟。帰りにはゆっくり低速前進で波を抑えて「申し訳ない」と目で挨拶。

横山通ベテラン船長。向こうは山の下閘門排水機場

●ポイント③「川と人とのかかわり」が離れて久しい。そのため川で釣りをするのも川辺で畑庭をするのも『個人的な好み』でしかない。それを「川をともに楽しみ共有する」意識にまで高めるには、舟で往来の日常化が必要なことだと痛感しました。

若葉マーク舟長 相楽 治

■水辺レポート

report 02

通船川・栗ノ木川下流再生市民会議

2010 地元の歴史を聞き通船川・栗ノ木川の未来を語るひととき

今年の「つうくり市民会議」（2010 年 9 月 11 日開催）は、これまでの「会議」という固いイメージを払拭した開催をめざした。この市民会議は発足して、10 年が経過し参加者の高齢化、減少化などの課題を抱える中で、検討、見直しを図っている。その 1 つとして「つうくり市民会議」の名称変更が議論された。しかし、名前ではなく内容で人々の心に感動を与えれば、若い人達を含め誰もが参加してくるであろう、との結論になった。

これまでの市民会議は、会議名を前面に出していたが、標記のように開催の内容を大きくして、会議名は小さくした。これは、開催会場の牡丹山小学校へ打合せに訪ねたときに、昨年のチラシをみた山際啓子先生からも「会議では人が集まらないでしょう」と言われたのである。

内容は、通船栗ノ木沿川の地域の方々が、地元の歴史、生い立ちをしっかりと知ることにより地域への思いや愛着が生まれる。そこで、地元の歴史をテーマに、地域で活躍している新潟合板振興（株）社長石川浩様、新潟市立牡丹山小学校長政谷英樹様から、それぞれ通船栗ノ木川の歴史や関わり、地域の歴史や変遷などを話してもらった。

「川が笑う日を夢みて」

またその間に「川が笑う日を夢みて」と題して新潟市東区市民音楽劇団による歌と劇があり、参加者の心を引き付けていた。次に牡丹山小学校 4 年生の活動発表である。126 名全員が発表するのであるが、パワーポイントを先生が操作して、活動テーマごとに、また項目ごとに 5 ～ 10 名の児童が順次、起立してワンフレーズずつ、大きな声で発表してゆくのである。

全員参加の発表は、一人一人が完璧にこなしていた。皆が心を一つにして取組み、その成果を父母や皆の前で発表する姿は自信に満ち素晴らしい。終わって会場から大きな拍手をもらい、各児童にとって忘れられない思い出となるでしょう。また、この影には先生方の並々ならぬ指導、児童と一体の信頼関係があってなし得ることと思った。

児童の活動発表

次に万代高校端艇部の活動発表があり、若い方々の初々しさが楽しく盛り上げてくれた。国体や各種大会への参加や練習の合間には、市民へのカヌー教室の指導員として、参加も OK とのこと。来年度は通船栗ノ木川で、市民向けのカヌー教室を開催しなければとの思いを強くした。

次に通船栗ノ木沿川の参加企業が、企業紹介と川との関わりを話した。近年、各企業は社業のみだけでなく、地域貢献が求められている。とりわけ通船栗ノ木川との関わりも深く、過去の高度経済成長時代における負の遺産は、環境が社会問題となって以降、それらが大きく改善されてきている。

つうくり川そうじ部会長の横山通氏が始めた川そうじが、ようやく沿川市民や企業にも認知され参加者も増えてきたところである。この流れを絶やすことなく、市民、企業、行政など輪を広げつつ続けることが大切である。川そうじはつらい仕事であり、終わったあとの何か楽しみを企画してゆくことが必要かと思われる。

つうくり市民会議は、このように若者、企業、市民の参加をめざして、先を読み変化しつつあるように感じている。

通船川・栗ノ木川下流の再生に向けて、2000 年に「川づくり案 2000」を発表し、その整備に行政と共に取組み様々な施策がなされてきた。ここで特筆すべきことは、河川法には「治水、利水、環境」の 3 本柱がある。当時ここに「川とのかかわり」が記載されている。近年ようやく認知されつつある「川とのかかわり」が既に織り込まれているのである。この見直しにあたっては、これを中心に据えて見直していきたい。

世話人　山岸　俊男

report 03

通船川清掃５年目と通船川管理小屋建設

船外機付ボートによる通船川清掃は2010年で4年を経過し、今年は5年目となります。昨年のトピックスは、船舶免許取得者が大幅に増加したことで2艇の清掃舟の運行ができるようになったこと、そして様々な経緯を経て通船川の筏が河川区域から激減し、川らしい表情を回復してきたことが挙げられます。自画自賛は私の趣味ではありませんが、当会の粘り強い直接行動の影響力の結果と考えています。さらに新潟県はいかなる要因で作られることになったかは明らかにしていませんが、河口の森の川ゴミ陸揚げ場の近くに新潟県が船着場を設置しました。巾1.8m、長さ20mの立派なものです。この英断には感謝しています。もう一つの画期的な出来事の一つに、12人乗りの大形船外機付ボートが日本財団と大成建設自然環境基金の助成によって就航したことです。この舟によって信濃川、小阿賀野川への運行が可能になり、格段に舟による運行半径が広がりました。この舟の有効利用が今年の最大の課題となっています。

河口の森脇の焼島橋の完成が近づき、工事エリアとして使われていた河口の森の復元が現在、県、市、住民の間で議論されています。河口の森に残された工事残土、浚渫土の取扱いと森の復元、更にその管理体制をどうするのか、そして船着場をこれからどのように利用するのかを巡って通船川再生は一つの大きな山場にさしかかっています。その山場とは、当会を含めた住民が通船川を具体的に管理し、将来に向けたビジョンを明確にし、実行に移す当事者としての力量を持っているのか、そしてその覚悟が問われているように思うからです。通船川再生は新潟県や新潟市がやるのではなく、住民がやらなければならないという当たり前の事実にようやく向き合う時が到来したからです。河口の森復元も川掃除も信濃川・小阿賀野川カヌー下り、そして舟運回復もそれを望んでいるのは私達であり、新潟県や新潟市ではないからです。その実現のために金を集め、汗を流し、二度と戻らぬ時間を使うことが問われているからです。前例も無く、河川法にも抵触する河川区域の住民の河川管理小屋を建設するための説得力はそのことによってしか購われないものだからです。新潟の先人の悪水排除の歴史はその事実を雄弁に語るものでした。

しかし、江戸時代と21世紀の課題は基本的に異なっています。又先人の苦労をそのまま追体験をするのは、学ばぬ愚か者でしょう。

21世紀の課題は、生産量を上げることで豊かになることではなく、生産の適正水準を定め、持続可能な文化を創造し、現在と共に次世代にも心豊かな生活を相続することだからです。川の環境はその周辺住民の生活を支える大きな因子の一つである以上、川再生の必要条件である住民の日常活動を支える川管理小屋を河川法や前例を持っても否定する説得力を持ち得ないと考えます。

とはいえ、この山場を越えるにはこの建前に頼ることはできません。人は建前だけで動くことはないからです。そこに先人に学ぶ意義があります。持続可能な川掃除のあり方を探り、広がる川遊びと川事業を構想し、河口の森を育てる道筋を示せる時、そう遠くない未来に人が集まる川管理小屋（船小屋）は出来ると思います。それは現世代の次世代に贈る無償の愛の一つになると信じます。

通船川清掃世話人　横山 通

report 04

春の通船川清掃イベント提案

通船川の川ごみ掃除を始め、今年で５年目となります。横山隊長の下、毎年、４月から12月までの第２土曜日の午前中に行ってきました。

写真 -1 平成 22 年５月の川掃除状況
（第二貯木場向かい側の左岸付近、非常にゴミが多い）

この川掃除は３年目までは船１艇で、参加者も５人前後でしたが、４年目からはボート免許の保有者も増えて常に２艇体制が可能になり、参加者も２～４名の市民が定着し、沿川企業や木材倉庫・行政の有志も加わるようにもなりました。また、船に「川掃除中」の旗を取付け、さらに、川ゴミの集積場を河口の森に設け、わずかながらですが沿川の方々に認識されるようになったと思います。

ただ、４年間も掃除を行って来た割にはゴミの量が減った感がさほどありません。常に 60 ～ 90 袋が集まります。特に、４月・５月・12 月の葦などの川草が少ない時期は、今まで草の中に隠れていたものが出てきて、たくさん回収されます。

５年目の川掃除として、現状は少しくたびれ、マンネリの気配も感じられます。また、根性とやる気だけでは、いずれ活動に限界が来る恐れもあると考えます。

そこで、川掃除にこれから何を加え、継続のエネルギーにして行くかを春のイベントとして提案したいと思います。

今までたくさんのゴミを回収しましたが、何がどれだけあったかは把握していませんでした。そこで、今年はまず、川ゴミの種類とその量を調査したいと思います。ただ単に我々だけで黙々と行うのでは「根性とやる気」の延長にしか過ぎないと思いますので、市民に公開する形で行いたいと考えます。このことは、川掃除の目標である「川をきれいにする＝川ゴミの削減」を達成する１つの方法になると考えます。見えるゴミ、見えないゴミを含め、現状を市民の方に知ってもらい、ゴミを半減させる具体的なきっかけにしてもらえると思います。当然、川掃除のアピールの場にもなり、活動を知って参加してもらえるような場にもなればと思います。

それと、川掃除を継続して行く上で、「楽しみ」があってもいいように思います。当然、たくさんのゴミが回収できれば達成感はありますが、疲労感もありそのまま「ご苦労様でした」で解散するのも、何か味気ない気もしています。そこで、今年は毎回とはいかないものの「バーベキューや芋煮会」的なことも計画したいと考えます。これが、本当に参加者にとって「楽しみ」か、と言われると少し疑問ですが、多少なりともご褒美的・慰労会的なイベントも必要と思います。

年末から年始に掛けて比較的穏やかな天候でしたが、

写真 -2 平成 22 年 10 月の川掃除状況
（船に「川掃除中」の旗が付く）

この原稿を書いている今は雪が降り積り、なかなか通船川のゴミ掃除を思い浮かべるには難しい天候のため、「公開ゴミ調査」や「楽しみイベント」の具体案はできていません。しかし、川ゴミが多く回収できる４月･５月頃（春）が時期的に適していると思いますので、もう少し天候が良く、暖かくなったら、横山隊長ともよく話し合って、詳細な時期も含め、具体的な計画を立てたいと思います。これらの川掃除イベントの実行に際しては、会員皆様のご協力をお願い致します。

世話人　安田　幸弘

report 05

千曲川環境シンポジウムと鮭の稚魚放流のお知らせ

今年の「千曲川の環境を考えるシンポジウム」は、65年振りに鮭のメスが発見された上田市で行うと共に、長野へ行く際西大滝ダム下流で鮭稚魚の市民環境放流を行ないます。

翌日は、今年の秋も上田の千曲川に鮭が戻ってくるように稚魚放流を行ないます。鳥居川のアファンの森では、C・Wニコルさんも参加の予定です。皆様の参加をお待ちしています。

千曲川環境シンポジウム

サケは海からの贈り物

◆日時：平成23年3月19日（土）14:00～17:30
◆会場：上田市駅前パレオビル
　　2階 上田情報ライブラリー会議室
　　上田市天神1-8-1　TEL 0268-29-0210
◆主催：千曲川河川環境を考える実行委員会
※参加費：無料・事前申込み不要

◆基調講演
「サケは海からの贈り物　～川は海と陸をつなぐコリドー（回廊）～」
講師：帰山 雅秀 氏
（北海道大学 海洋生物資源科学部門海洋生物資源保全管理学分野 教授）

● 鮭稚魚の市民環境放流報告
報告者：加藤 功（NPO法人 新潟水辺の会事務局長）

◆ パネルディスカッション
「鮭が戻る千曲川の姿を語ろう」

【パネリスト】
・今井　正子 氏（長野県水と緑の会副代表、長野県議会議員）
・高橋　大輔 氏（千曲川流域学会 理事、長野大学環境ツーリズム学部 准教授）
・相澤　博文 氏（長野県高水漁業協同組合 組合長）
・春原　昌明 氏（長野県上小漁業協同組合 組合長）
・吉井 文夫 氏（新潟県能代川サケ・マス増殖組合 組合長）

【コーディネーター】
　大熊　孝（NPO法人 新潟水辺の会会長）
【コメンテーター】
　帰山　雅秀 氏（北海道大学海洋生物資源保全管理学分野 教授）

お問合せ先：
千曲川流域学会事務局
（千曲川河川環境を考える実行委員会事務局）
〒386-1298　長野県上田市下之郷658-1
TEL：0268-38-7771 FAX：0268-39-0002
E-mail：ryuiki@nagano.ac.jp

～次世代へつなぐ 環境づくり～

「鳥居川 鮭稚魚の市民環境放流」

●市民環境放流（稚魚3万匹放流）午後2時から（雨天決行）
○主 催　NPO法人 新潟水辺の会
○共 催　（財）C.W.ニコル・アファンの森財団
○後 援　信濃町教育委員会
○放流会場 信濃町鳥居川第四発電所近くの鳥居川
（詳細はチラシをご覧下さい）

**「千曲川環境シンポジウムと
サケの稚魚放流ツアー」**

新潟水辺の会では1泊2日で「千曲川環境シンポジウム」と「サケの稚魚放流」に参加するツアーを企画しました。
詳しくは本紙12ページをご覧下さい。
多数のご参加をお待ちしております。

※この催しは三井物産環境基金助成事業「新潟のサケを、長野（上田・松本）まで遡上させる活動」の一環で行います。

■水辺レポート

report 06

65年ぶりの鮭の遡上、ロマンと不可思議の狭間で

◆ 朱鷺の羽根

伊勢神宮の神宮式年遷宮のたびに新調する神宝の一つに須賀利御太刀（すがりのおんたち）があり、その柄の装飾として朱鷺の羽根を2枚使用していると聞いた事がある。神宮式年遷宮は、持統天皇の治世690年に第1回の神宮式年遷宮が行われ、1993年（平成5年）の第61回式年遷宮まで、およそ1300年にわたって行われ、現代の私たちに悠久のロマンを掻き立てている。

2003年10月最後の特別天然記念物の朱鷺（雌のキン）が佐渡で死亡し、日本産のトキは絶滅したが、中国産朱鷺のつがいが1999年に中国より贈呈されて人工増殖が始まり、その子孫が現在171羽となっている。2010年11月1日より、第三次自然放鳥が行われ17羽が大空に飛び立っていった。

我が家のある新潟市西区にも一昨年の第一次放鳥された朱鷺10羽の内の1羽が突然訪れねぐらを作り、日本海に浮かぶ佐渡島の夕日をバックに、あの輝く朱鷺色を私たちに惜しげもなく見せてくれ、私達に大きな感動を与えてくれた。

その様な3月10日、野生復帰ステーションの順化ケージで、8羽が死亡、2羽が怪我をしているのが発見された。後の調査で、テンが侵入してトキを襲ったものと判明したが、当初はどこから何が朱鷺を襲ったのか不思議と新聞やテレビは報じていた。

◆ 65年ぶりの鮭発見

10月20日午前7時、朝の散歩中突然私の携帯が鳴った。こんな朝早くから誰かと画面を見ると、長野県上田市の上小漁業協同組合の真田理事さんからであった。だいぶ慌てて「上田に鮭が上がった」と言う。私も「ええ」と言いながら言葉が出ない。

信濃川河口より253km上流の上田の千曲川に設置されたアユ用の簗場で、午前5時過ぎに見つかった。体重1.6kg、体長60センチ余の3年魚、産卵を終えたメスである事が分かった。千曲川の上田に鮭が見つかったのは65年ぶりで、発見者の中山さん自身「ここで鮭を見るのは初めて」とびっくりしていたと翌朝の新聞記事にあり、長野県民に大きな波紋を投げかけた。

昨年12月4日のシンポジウムで北海道大学の上田教授より、鮭は生まれ育った川を下り、3～5年後その川の匂を探りながらはるばる2万キロの旅をして育った川に戻ってくると言う事を教えて頂いた。このロマンと信濃川の河川環境の改善を目指して私たちNPO法人 新潟水辺の会は、4年前より春に千曲川・犀川にかつてのように「鮎や鮭などの魚類が産卵し、降下・遡上出来る河川環境」実現の為、鮭稚魚の市民環境放流を行って来ていた。

◆ 信濃の国と鮭の縁

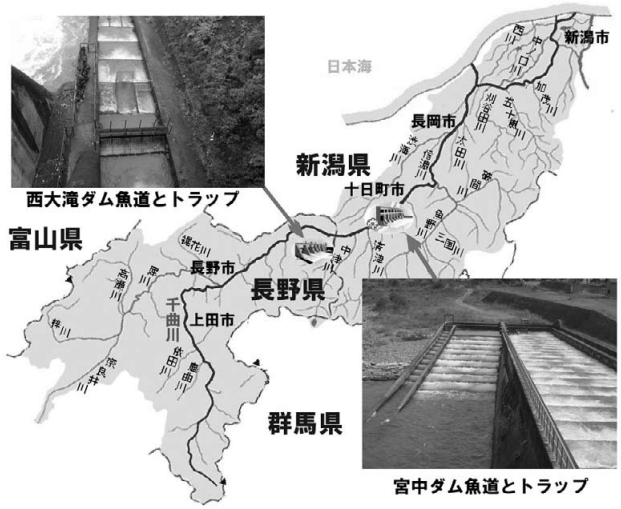
かつて千曲川水系には多数の鮭が遡上し、昭和初期には年間2～3万尾が漁獲されていたが、国策による十日町市宮中ダム、飯山市西大滝ダムの建設で急激に減少し、昭和25年の漁獲記録が最後となった。長野県では10年前まで899万尾の鮭の稚魚を放流し「鮭復活対策事業」を21年間にわたって行ってきたが、長野まで帰ってきたのはわずか48尾という結果で、その事業を終えた経緯がある。

JR東日本の不正取水をきっかけに、これまで数十年水の少なかった信濃川中流域に昨年3月大河・信濃川が甦り、秋には河口よりの120kmの宮中ダム（JR東日本）魚道にこれまで数匹であった鮭が160尾遡上し、全て上流の信濃川に放流した。

一昨年の9月30日宮中ダム上流18kmの西大滝ダム(東京電力）上流2kmの川で、数年ぶりにオスの鮭が発見された。発見者によるともう一尾近くに居たと言う。その後西大滝ダム魚道にも2尾の鮭が遡上してきた。信濃川中流域の水量がかつてのように戻ってきたからである。

新潟水辺の会では一昨年と昨年、東京電力の許可を得て西大滝ダム魚道に観察ビデオカメラを設置すると共に、高水漁業協同組合の協力を得て目視による鮭の遡

上調査を行ってきた。信濃川河川事務所も西大滝ダム魚道に網のトラップを掛けて、魚類の遡上調査を行い今年最初の鮭が10月12日採捕され、上流に放流された。同16日1尾、17日1尾と、新潟に居る私たちに観察している小田切さんより連絡が入り、後日写真を送ってもらう事になっていた。だがその2日後の20日朝、西大滝ダムより90km上流の上田に鮭が発見されるとは、誰もが想像すらできなかった事が現実に起こった。後にメールで送られた写真を専門家に見て頂いた結果、17日に採捕された魚は鱒であったり、体長、体重などよりいずれも該当しない事が判明した。



◆ 鮭はいつ西大滝ダム魚道を通ったのか？

今年の特別暑かった夏の気象は海水にも大きく影響を与え、8月末の北海道沿岸部の海水温は平年に較べ4～5度と異常に高く、冷水性の鮭にとっては接岸しづらい状況となり北海道すら鮭の水揚げが9月にずれ込んだ。9月10日宮中ダム魚道に鉄製の鮭捕獲用トラップをJR東日本が設置した。それから20日後の10月1日、待望の鮭1尾が入り、10月末までに137尾を捕獲、宮中ダム湖に放流され上流に向った。西大滝ダム魚道の網のトラップ設置は宮中設置より20日遅い9月30日である。9月10日以前に鮭が信濃川より千曲川に上ったとは考えられない。では、上田で発見された鮭がいつ西大滝ダム魚道のトラップの網を潜り抜けて千曲川を上ったのか不思議でならない。

今回の魚道に設置したトラップは昨年の捕獲箱を改良したものと聞いていたが、それは素人の私が見ても不十分と言わざるを得ない。その理由として、トラップまで入った鮭を2回（10/15、10/27 ）とも数人が確認して採捕しようとしたが何処へ行ったのか行方不明となった事実がある。

朱鷺がテンに襲われた状況と同じく、上田で発見された鮭は魚道に設置された網の隙間を潜り抜けて上流に行ったとしか私には考えられない。その理由として、魚道に仕掛けた網の一部には鮭が通れるゆるみがある上、毎朝トラップのゴミ清掃をやっている小田切さんより2段ある網の上流はゴミが溜まらず下流のみに木の葉などのゴミが溜まると聞いた。

トラップに入った鮭を懸命に探す小田切さん

これは何を意味するか、網の下にはそれだけの空間が存在した事を証明している。

◆ 鮭は物質循環の重要な担い手

65年振りに鮭の発見された上田の駅前のパレオの会議室で3月19日、鮭のシンポジウムが行なわれる。基調講演に北海道大学の帰山教授をお願いし、鮭が海の栄養分を山に届ける物質循環の重要な担い手であり、山の森を育てる生物多様性を高める役割を行なっている事などの話が聞けるのではないかと大いに楽しみにしている。

後日西大滝ダムで採捕された鮭の鱗を新潟市にある日本海区水産研究に持って行き、鑑定して頂いた。結果、今年最初に発見された鮭は2年魚で、ベーリング海へは行ってはいないが2年魚は大変珍しく、2年魚が捕獲された次年には多くの鮭が上ると言う。

東京電力の河川環境配慮への努力に期待しながら、鮭がベーリング海への2万キロ往復の旅の苦労とロマンは不可思議の旅のおまけではないか。佐渡で朱鷺が増殖したように、今秋千曲川へ、大量の鮭の遡上があると私は不可思議な確信を持っている。

事務局　加藤 功

■水辺レポート

report 07

素人の魚道式ダム見学記- 3

信濃川・宮中ダムと千曲川・西大滝ダム

◆水力発電

幕末の開明的な殿様のひとりである島津斉彬（1809 ～ 1858）が、工業用動力として蒸気より水車動力の計画を建てたが中断した。その後の明治 15 年頃、島津家当主の忠義が遺志を引き継ぎ、集成館の電源として設置したのが日本での水力発電の始まりと書いてあった。（出典 : 尚古集成館の展示表示）

現在水力発電は、温室効果ガスの排出量が極めて少なく、地球環境に負荷をかけない再生可能な自然エネルギー源であるとして注目を集めているが、魚類や河川に負荷をかけてはいないだろうか。

◆西大滝ダム

東京電力の西大滝ダムは、昭和初期の軍需産業の電力需要増大を見越して、東京電燈会社が昭和 11 年に建設工事に着手し、昭和 14 年に完成した。

西大滝ダムより下流 22km の東京電力信濃川発電所で発電される年間発電電力量 13 億 KW 時は、佐久間ダム発電所と国内発電量 1、2 を争っている。

建設当時と現在の魚道を比較してみる。

改修前の魚道は先端部でカーブして川に開口していたが、改

現在の魚道

改修前の魚道

修後は屈折した階段魚道にしている。呼び水により魚を魚道に導くために改修したと考えるが、効果はいかほどあったのか疑問である。

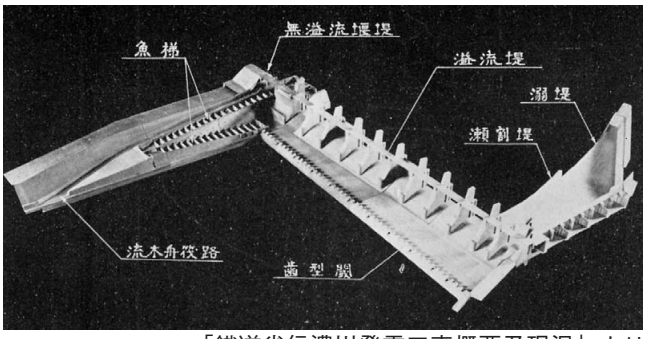
◆宮中ダム

宮中ダムが計画されたのは大正 8 年、当時の原内閣が石炭の節約を図る目的で信濃川の水力発電を決定し大正 10 年より軽便線の工事、昭和 6 年第一期工事に着手、昭和 14 年 11 月完成し発電を開始した。

宮中ダムの取水後は 3 箇所の発電所で発電され、その電力は JR 東日本で消費する電力量の 23% を賄っているが、不正取水問題の発覚により、2009 年 2 月 13 日から 2010 年 6 月 9 日まで発電が停止された。

魚道については信濃川發電工事概要に載っていた。

魚梯は階段潴流式で幅 7.3 米乃至 11 米、勾配十五分の一、



「鐵道省信濃川發電工事概要及現況」より

溢流堰堤右岸部より始まり屈折して堰堤水蓐部に開口する。流筏路は魚梯に平行して之を設ける。

とある。当時魚道（魚梯）を設ける事は画期的と言うより、多くの魚類が遡上と降下をしていたためであり、流域に住む人々にとって鮭や鱒などの蛋白資源が必要であったからであろうと考える。

昭和 6 年 10 月、長野県の十八漁業組合による鉄道省信濃川発電所設置に対する上申書がある。

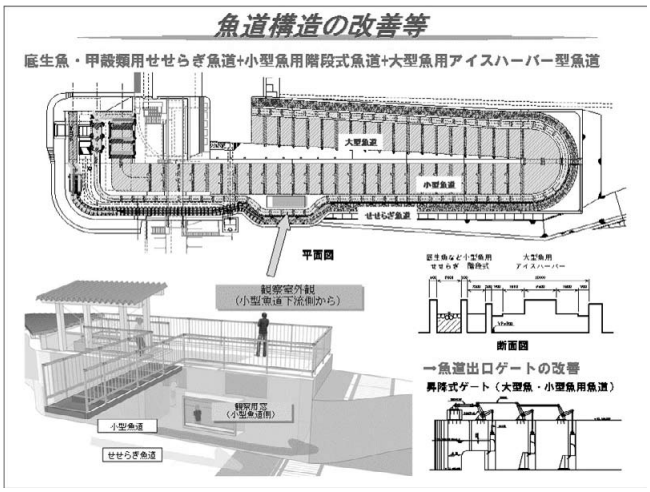
1. 魚梯の設備及付随事項

（ロ）魚梯下流ノ水量ヲ出来ウル限リ多量ニセラルルハ勿論、常時土砂吐キニ注意シテ、魚梯ノ効果ノ発揮ニ努メラシタシ事。

（ハ）放水口ヨリ多量ノ河水ヲ放流セラルベキニヨリ、之ニ迷入スル遡上魚類ヲ少ナカラシムル方法ヲ講ジセラキタキコト。

新潟水辺の会が要望している事が当時より言われている。技術的には進歩していないことか。

最後に JR 東日本が、「信濃川中流域水環境改善検討協議会」の提言を受けて、、平成 24 年度完成の宮中ダム魚道改造を計画しているのでその効果を大いに期待している。



事務局　加藤 功

report 08

「埼玉県入間川の再生事業」と市民組織「いるま川筋文化ネットワーク」

各地で鮭や鱒が川に戻りはじめた。川が本来の役割を担い、流域の人々の心に川への回帰意識と漠然とした危機感から行動する事は、ヒトの本能が辛うじて活きついている証かもしれない。私を育てた多摩川支流は、高度経済成長政策によって、無残なドブ川と雑然とした街八王子市を造り上げた。今は絹織物も川文化も無く、川遊びや憩える場所も無いが、しかし、いつかは清水に戻したいとの願いはある。

大学の前を流れる入間川は、荒川の支流として、多摩川に注ぐ淺川や秋川と類似した水辺文化を残し、八高線で結ぶ絹織物の交流は川遊びも伝えて来た。

この川でカヌー授業や公開講座、障害者のカヌー教室などを20年も楽しんで来た。

「いるま川筋文化ネットワーク」は、駿河台大学の公開講座の中で生まれ、すでに3年を経た。会の運営は新潟水辺の会を手本とし、その活動と歴史から多くを学びつつある。

2010年度の埼玉県河川再生百選事業としてカヌープログラムの実績が評価され採択された。これを機に会の目的である①環境保全②スポーツ・レクリエーション③芸術・文化④教育⑤福祉生産⑥研究開発や出版などの諸活動も更に充実すると思われる。

従来の再生事業は、河川周辺の歩道や運動公園の整備が主流であったが、生物との共存を視野に入れた水辺活用のダイナミックな活動と流域の“市民運動を重視した我々の提案”は、「入間川水系と里山である加治・阿須丘陵の自然環境を資源とした水辺の総合文化活動」であり、棲みやすい街づくりを目指した特色がある。この提案では、入間川の最も醜い（写真1、矢颪堰）地域をアクアエコミュージアムとし再生させ、魚とカヌーの共生を模索している。かつてはこの川筋を筏組が江戸の町へ西川材を流し、川では子どもたちが泳ぎ、魚取りを楽しむ清流であった。人々は川と強く結びつき、川は子どもを育ててきた。しかし、地方都市の所沢や池袋の通勤エリアとして飯能市は、山間奥地の宅地造成が進み、有馬ダムの設置は治水や利水による中流域の流量不足をまねき、水辺は瀕死の状態にある。汚れた川は「川遊びは危険だ」とする考え方が蔓延し、外遊びの出来ない子どもと、川に背を向けた生活による「川に無関心な住民」を増加させた。

再生運動は、清流をとり戻し「川はルールを守れば安全なプレイグラウンド」であることや市民が集い楽しめる川筋流域水辺公園の建設提案でもある。

カヌーやボート遊びの拠点化や沈下橋や築場の設置は人々の交流に弾みがつき、県内外からの観光集客も期待できる。河川流域に伝わる水辺文化や観察調査活動なども総合的な河川への関心の高まりを約束させる。荒れ果てた農業止水堰にカヌー水路を兼ねた魚道を設け、淡水魚の観察水路の整備によって景観を修正し、ユニバーサルデザインを基調とした水辺事業の結果、魚の遡上や繁殖で河川が甦えることを期待している。そのためにも新潟水辺の会とのネットワークや先輩諸氏のアドバイスは必要である。

いるま川筋文化ネットワーク代表世話人
土方 幹夫（新潟水辺の会世話人）

写真1. 無残な矢颪農業止水堰跡

写真2. 沈下橋設置は可能か

写真3. ユニバーサルデザインプログラム障害者カヌー講習会の仮設スロープ

■水辺レポート

report 09

新刊紹介：「社会的共通資本としての川」

宇沢弘文先生との編著ということで、「社会的共通資本として川」（東京大学出版会、2010 年 11 月、436 頁、4800 円＋税）という本を出版したので、その紹介をさせていただく。

宇沢先生は、「自動車の社会的費用」（岩波新書、1974 年）で著名な経済学者で、1997 年文化勲章を受賞されている。東京大学を定年後、一時、新潟大学教授をされていたが、その後吉野川第十堰を一緒に調査して親しくなり、私の定年退職記念会にもご出席いただいた。本書は 2008 年 4 月に最初の企画が出され、下記目次にあるように、私の恩師である高橋裕先生を始め、川の問題に取り組んできた執筆陣にお願いして、民主党政権下で「脱ダム論」が喧しくなった 2009 年を挟んで、出版まで約 2 年半かかった。

「社会的共通資本」は、宇沢先生がこの十数年来提唱さてきた概念であり、3 つに類型されている。まず、山、森、川、海、水、土などの自然環境、次いで、道、橋、鉄道、上・下水道、電力・ガスなどの社会的インフラストラクチャー、そして教育、医療、金融、司法、行政、出版などの制度資本に分けられている。原稿スペースがないので極論になるが、この考え方は、例えば、今までの経済学が収奪と克服の対象としてしか見てこなかった自然を人間が人間らしく尊厳を持って生きていくに必要な環境として位置づけ、“無事な社会”を構築・持続させていくことに主眼がある。本書は「社会的共通資本としての医療」（2010 年 3 月）に次ぐ第 2 弾であり、今後シリーズ化される予定である。

なお、本書の注文に際して、「新潟水辺の会特価」と明記して、直接、東大出版会（order@utp.or.jp）にメールすれば、2 割引になります。

****

序 章 社会的共通資本としての川を考える
（宇沢弘文・東京大学名誉教授）
第 I 部 持続可能な治水と利水の実践
第 1 章 20 世紀の河川思想を振り返る
（蔵治光一郎・東京大学大学院愛知演習林教授）
第 2 章 水利文明伝播のドラマ――スリランカから日本へ
（茂木愛一郎・株式会社慶應学術事業会）
第 3 章 都江堰と 2300 年の水利――四川省大地震からの復興（石川幹子・東京大学大学院都市工学専攻教授）
第 4 章 技術にも自治がある――治水技術の伝統と近代
（大熊 孝・新潟大学名誉教授）
第 II 部 リベラリズムとしての脱ダム思想
第 5 章 コモンズにはじまる信州ルネッサンス革命――「脱ダム」宣言のアスピレーション（宇沢弘文）
第 6 章 脱ダムから緑のダムへ――エコロジカル・ニューディール政策としての森林整備（関 良基・拓殖大学政経学部教授）
第 7 章 吉野川第十堰と緑のダム―「流域主義」の視点から（中根周歩・広島大学生物圏科学研究科教授）
第 8 章 宝としての球磨川・川辺川にダムはいらない
（高橋ユリカ・ルポライター）
第 9 章 なぜダム建設は止まらないのか
（岡田幹治・ジャーナリスト）
第 10 章　八ッ場ダム中止への道のり
（嶋津暉之・水資源開発問題全国連絡会代表）
第 III 部 コモンズによる川の共有
第 11 章　自然としての川の社会性と歴史性
（高橋 裕・東京大学名誉教授）
第 12 章　川・魚・文化―天塩川水系・サンル川から考える（小野有五・北海道大学地球環境科学研究院教授）
第 13 章　淀川における河川行政の転換と独善
（宮本博司・株式会社樽徳商店、元国交省）
第 14 章　地方分権―川を住民が取り戻す時代
（神野直彦・東京大学名誉教授）
あとがき（大熊 孝）

代表　大熊 孝（新潟大学名誉教授）

report 10

新潟水辺の会のホームページ再構築について

新潟水辺の会が行う鮭稚魚の市民環境放流活動は、三井物産環境基金の助成を受けておこなっている活動です。

その助成成果をあげていく目的で、三井物産環境基金から中間支援のコンサルティングが入り、当会の広報活動の強化とホームページの見直しが課題となりました。

ホームページ再構築の議論は当会内部で昨年７月から始まっておりましたが、これをきっかけにプロジェクトチームを編成し、具体的な作業が進められることになりました。

中間支援を受けた話し合い（昨年 10 月）の中で浮かび上がった課題は、次の３点でした。

1. 各種の活動が情報の羅列になり、総合的に体系づけられた情報として伝わらない。会の主旨やロマンある未来像、そこにいたる筋書きが見えてこない。
2. 広報活動の目標や対象者の絞込みが不明瞭。（広報戦略が不明瞭）広報活動の視座が常に発信側にあり、コミュニケーションターゲットの側に立った広報活動になっていない。（聞きたいことが、聞きたい言葉で、語られていない。）

行政や特定企業と利害が相反する場合があるが、その場合は伝え方に配慮を要する。

3. 情報発信の担い手が限定的。（多くの人が担い手となれる仕掛け作りが必要。）

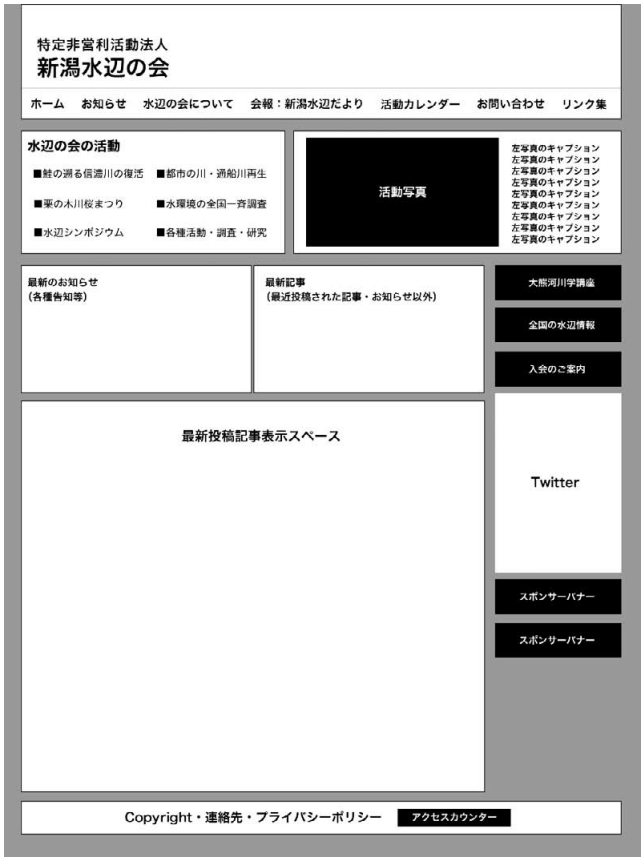
また、活動の柱につきましては、①水辺を守る、②水辺を遊ぶ、③水辺を育む、の三つの切り口に沿った各種の活動を展開していくことと整理し、その参加者・理解者・協力者を増やしていくために、広報活動を強化していくことといたしました。

当会の広報活動の対象者には、会員、水辺に関心がある人、子どもたち、一般市民、企業・団体、隣県の個人･団体、報道機関などが考えられますが、これからは対象ごとに戦略を持った能動的な広報活動が求められることになります。

その広報活動強化の一環として、当会のホームページを次のように再構築いたします。

新しいホームページでは、当会が取り組む各種の活動を体系づけて情報の整理・発信ができるようにするとともに、各活動を先導するメンバーが夫々入力担当者となって、リアルタイムな情報を直接書き込める仕組みを取り入れることといたし、会員その他、多くの方々から参加いただけるホームページを目指しています。（複数人による記事の書き込みや、Twitter の活用などを行います。）

トップページのイメージ（案）は画像でご覧いただく通りですが、タイトルバナーの下にメニューバーが用意された、使いやすい構成になっています。



ホームページを構成する主なメニューとして「水辺の会の活動」、「活動写真」、「最新のお知らせ（告知等）」、「最新記事（投稿記事）」、「大熊河川学講座」などが設けられます。

「水辺の会の活動」には６項目の見出しを設けましたが、クリックによって下の階層に進み、直近の活動内容を閲覧することができます。

タイトルバナーには、当会のシンボルマークであるカワセミの絵が動く、楽しい工夫も考えております。

ホームページ再構築にかかるスケジュールにつきましては､サイトのシステム構成が１月末､ビジュアル面での作り込みが２月末、記事の投稿が可能になるのと現在のサイトに掲載されている情報の移行は３月からとなっております。

皆様、この春に誕生する、新潟水辺の会の新しいホームページに、ご期待ください！

世話人　佐藤 哲郎

（注：トップページのイメージや構成は執筆時点の案のため今後変更となる可能性があります）

新潟水辺イベント情報　新潟水辺の会

「千曲川環境シンポジウムと鮭の稚魚放流」ツアーのお知らせ

◆日　時　平成 23 年 3 月 19 日（土）～ 20 日（日）1 泊 2 日
◆シンポジウム会場　　上田市駅前パレオビル 2 階 上田情報ライブラリー会議室
（上田市天神 1-8-1　TEL 0268-29-0210）
◆シンポジウムのテーマ「鮭が戻る千曲川の姿を語ろう」
○基調講演　帰山 雅秀氏（北海道大学 海洋生物資源科学部門 海洋生物資源保全管理学分野 教授）
「サケは海からの贈り物 ～川は海と陸をつなぐコリドー（回廊）～」
○主催　千曲川河川環境を考える実行委員会
○助成　三井物産環境基金事業（2008 年～ 2011 年助成事業）
◆鮭稚魚環境放流　千曲川・鳥居川で
◆集合場所　新潟駅南口ロータリー　07:00 時間厳守
◆移動手段　新潟市からはマイクロバス 1 台 25 人乗りで移動します。
他の移動手段の方は事務局加藤までご連絡下さい。
◆費　用　￥7,000 円（大人 一泊二食付）
￥4,500 円（子ども 一泊二食付）
（往復のマイクロバス代及び高速道路代金の負担はありません）
◆宿　泊　上田市内 上田プラザホテル
長野県上田市中央 1-1-1 電話 0268-25-3000
◆申込み期限　2 月 28 日（月）
◆申込先　加藤 功 ecoline@mvd.biglobe.ne.jp　090-4701-3910

■□日 程□■
1 日目
07:00　新潟駅南口 PLAKA1 前ロータリー集合（時間厳守）
07:10　新潟駅出発
10:00　千曲川へ稚魚の市民環境放流（西大滝ダム下流）5 万尾
昼食（各自負担）
14:00　「千曲川環境シンポジウム」
18:30　終了後ホテルへ 夕食
2 日目
09:00　宿を出発
09:30　千曲川へ、稚魚の市民環境放流（上田市）　4 万尾
昼食（各自負担）
14:00　鳥居川へ稚魚市民環境放流（アファンの森）　3 万尾
17:30　新潟駅到着、散会

鮭稚魚の市民環境放流ツアー　C.W.ニコルさんも参加の予定です

千曲川環境シンポジウムと鮭の稚魚放流

今年の「千曲川の環境を考えるシンポジウム」は、65 年振りに鮭のメスが発見された上田市で行うと共に、長野へ行く際西大滝ダム下流で鮭稚魚の市民環境放流を行ないます。翌日は、今年の秋も上田の千曲川に鮭が戻ってくるように稚魚放流を行ないます。鳥居川のアファンの森では、C・Wニコルさんも参加の予定です。皆様の参加をお待ちしています。

◆日　時　平成 22 年 3 月 19 日（土）～20 日（日）1 泊2 日
◆シンポ場所　上田市駅前パレオビル 2 階 上田情報ライブラリー会議室
上田市天神 1－ 8－ 1　TEL 0268-29-0210
◆シンポテーマ　「鮭が戻る千曲川の姿を語ろう」
◆基調講演　帰山 雅秀氏（北海道大学 海洋生物資源科学部門 海洋生物資源保全管理学分野 教授）
「サケは海からの贈り物 ～川は海と陸をつなぐコリドー（回廊）～」
○主催　千曲川河川環境を考える実行委員会
○助成　三井物産環境基金事業（2008 年～2011 年助成事業）
◆鮭稚魚環境放流　千曲川・鳥居川で
◆集合場所　新潟駅南口ロータリー　7 時 時間厳守
◆移動手段　新潟市からはマイクロバス 1 台 2 5 人乗りで移動します。
他の移動手段の方は事務局加藤までご連絡下さい。
◆費　用　￥ 7,000 円（大人　一泊二食付）
￥ 4,500 円（子供　一泊二食付）
（往復のマイクロバス代及び高速道路代金の負担はありません）
◆宿　泊　上田市内　上田プラザホテル
〒386-0012　長野県上田市中央 1-1-1　電話 0268-25-3000
◆申込み期限　2 月 28 日（月）
◆申込先　加藤　功　ecoline@mvd.biglobe.ne.jp　090-4701-3910

集合場所：南口
PLAKA1 付近

■□日　程□■
1 日目　7:00　新潟駅集合（時間厳守）
7:10　新潟駅出発
10:00　千曲川へ、稚魚の市民環境放流（西大滝ダム下流）　5 万尾
昼食
14:00　「千曲川環境シンポジウム」
18:30　終了後ホテルへ　夕食
2 日目　9:00　宿を出発
9:30　千曲川へ、稚魚の市民環境放流（上田市）　4 万尾
昼食
14:00　鳥居川へ稚魚市民環境放流（アファンの森）　3 万尾
（C.W.ニコルさんも参加予定）
17:30　新潟駅到着、散会

編集後記：環境を考え、いや実は、経済的な理由が大きいのですが、去年から車をやめて、仕事以外では、自転車に乗っています。通勤ではシティサイクルと電車を使い、ちょっと遠い所へはロードバイクで出かけます。昔、アメリカへ行った時も自転車旅行の女性を多く見かけました。よく通っている新潟市市民活動支援センター（新潟市・西堀六番館ビル 3 階）がある古町界隈にも 4 軒の自転車屋さんを見つけましたし、新潟市内でも、にいがたレンタサイクルが 21 箇所で最初の 3 時間まで 100 円、その後 1 時間毎に 100 円で自転車を貸し出しています。また新潟市が、歩行者・自転車・自動車が安全で安心して共存できる道路空間を目指して、「新潟市自転車利用環境計画」（平成 22 年 3 月）を策定しています。まだ、具体的な形は見えませんし、放置自転車などモラルの問題もありますが、安全に楽しく自転車に乗ることができる街になることを期待します。

編集人：森本　利

●事務局からのお願い
インターネットメールで随時会員の皆さんに情報をお届けしています。メールアドレスを新しく持った方、アドレスを変更された方は事務局までお知らせください。

●発行：特定非営利活動法人 新潟水辺の会
●事務局
〒 950-2264
新潟市西区みずき野 4-7-15 大熊 方
Phone 025-264-3191　Fax 025-264-3260
ホームページ
http://www17.plala.or.jp/mizubenokai/
メール　mizubenokai@plum.plala.or.jp
●会員数　個人会員 182 名、法人会員 9 団体
（2011 年 1 月 1 日現在）